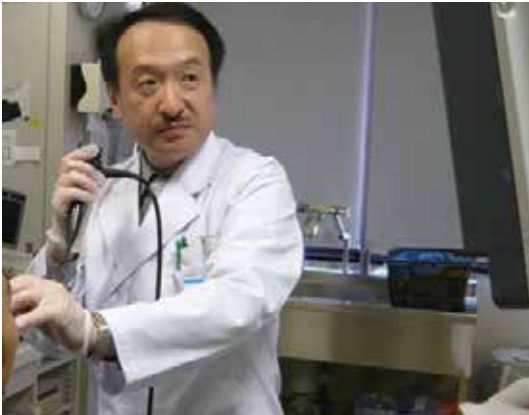


耳鼻咽喉科

Department of Otolaryngology, Head and Neck Surgery



機能温存・再生をめざした 頭頸部機能外科

頭頸部が担う機能の温存、再生を主軸に据え、特に下記のような医療に力を入れている。①人工内耳手術：近年では乳幼児の高度感音難聴症例の診療・手術に力を入れている。②内視鏡下鼻頭蓋底手術：難治性副鼻腔炎や頭蓋底腫瘍に内視鏡を用いた手術を施行している。③音声外科手術：声帯麻痺や痙攣性発声障害に対しては甲状軟骨形成術、声帯ポリープに対しては喉頭微細手術を積極的に行っている。④嚥下機能外科：嚥下機能の改善を目指す嚥下機能改善手術や高度嚥下障害に対する誤嚥防止手術を行っている。⑤頭頸部がんの機能温存手術：癌の制御と共に嚥下や発声機能の温存を重視し、早期がんに対してはロボット手術、経口的鏡視下手術(ELPS)、進行がんに対しては化学療法や放射線治療を併用した機能温存治療を放射線科・形成外科と共にチームとして実施している。

代表的診療対象疾患

両側高度感音難聴、聴神経腫瘍、メニエール病、顔面神経麻痺、慢性中耳炎、真珠腫性中耳炎、耳硬化症、慢性副鼻腔炎、嗅神経芽細胞腫、アレルギー性鼻炎、反回神経麻痺、甲状腺腫瘍、喉頭がん、咽頭がん、副鼻腔がん、口腔がん、唾液腺腫瘍、嚥下障害

診療体制と治療実績

外来診療体制と実績

外来患者数は年間延べ27,000人である。専門外来は、咽頭、中耳炎・側頭骨外科、人工内耳、難聴、小児難聴、遺伝難聴、鼻・副鼻腔、音声・嚥下、腫瘍、甲状腺、めまいの各領域に分かれ、専門性の高い医療を提供している。またディサージェリユニットを利用した日帰り・短期滞在手術を約300例行っており、患者さんの負担軽減を図っている。

入院診療体制と実績

入院患者数は700～800例で、そのうち中央手術室を利用する手術は約450例である。綿密な術後管理を要するような手術症例や放射線治療、抗がん剤治療、強い急性炎症例、めまい、突発性難聴、顔面神経麻痺などが入院の対象である。病床数は45床、病床稼働率は93%、在院日数は平均17.9日であった。主な治療の実績は表の通りである。

①主な入院治療と件数		②主な Day surgery unit 利用手術と件数	
鼓室形成術	76	鼻中隔矯正・下甲介手術	24
人工内耳植え込み術	33	内視鏡下鼻副鼻腔手術	57
聴器がん(手術)	3	口蓋扁桃摘出術	28
鼻・副鼻腔がん(手術または放射線)	11	声帯ポリープ・腫瘍切除	70
口腔癌(手術または放射線)	56	喉頭形成術	7
喉頭がん(手術または放射線)	16	頸部リンパ節生検	40
上咽頭癌(放射線)	4		
中咽頭がん(手術または放射線)	20		
下咽頭・頭部食道がん(手術または放射線)	14		
唾液腺がん(手術または放射線)	4		
経口的鏡視下手術	30		
甲状腺・副甲状腺手術(がんを含む)	120		

臨床研究の取り組み

人工気管を用いた気管再建

医工連携事業推進事業として当科主導のもと、生体内組織再生誘導型人工気管を用いた気管再建の有効性、安全性に関する医師主導治験を開始予定である。本研究では悪性腫瘍もしくは炎症性疾患による気管欠損を人工気管を用いて再建し、気管内腔径を主要評価項目とし、その他粘膜再生、動脈血酸素飽和度、有害事象及び不具合の発生頻度などを評価する。人工気管の有効性、安全性を検証する臨床研究であり、現在実施準備を進めている。

咽頭がん、喉頭がんに対する経口的ロボット支援手術

厚生労働省科学研究費支援事業として当科が主導して咽頭がん、喉頭がんに対する経口的ロボット支援手術の有効性・安全性の評価を2013年度より開始した。本研究は早期の咽頭がん症例に対し経口的ロボット支援手術を施行し、頭頸部外科領域におけるロボット支援手術の有効性と安全性を検証する臨床試験であり、先進医療Bとして実施している。また京都大学における経口的ロボット支援手術は関西圏内における国家戦略特区プロジェクトの一つとして採用されている。目標症例数20例で、東京医科大学、鳥取大学と協力して施行している。本年度までに当院で7例に実施している。

鼓膜再生臨床試験

当科では、鼓膜穿孔に対する外来で処置可能な新規治療法の安全性と有効性の確認を目的に、先端医療振興財団先端医療センター病院、慶應義塾大学病院耳鼻咽喉科と共同で「NPC-18とFBG-18を用いた鼓膜再生療法に関する第Ⅲ相試験-多施設共同医師主導治験-」を行った。全国での目標症例数20例のうち当科では6例を担当し、2015年8月中に全例エントリーを終了した。

内転型痙攣性発声障害に対するチタンブリッジを用いた甲状軟骨形成術2型

厚生労働省科学研究費委託事業による委託業務として、内転型痙攣性発声障害に対するチタンブリッジを用いた甲状軟骨形成術2型の有効性、安全性に関する研究を2014年より開始した。VHI-10合計点の変化を主要評価項目とし、その他発声機能検査、音響分析評価、有害事象、不具合の発生頻度などを評価し、チタンブリッジを用いた甲状軟骨形成術2型の有効性、安全性を検証する臨床研究である。目標症例数は20例で、熊本大学主導のもと、北海道大学、横浜市立大学と協力して行っている。